

でも子どもに与えられる最初の書物とはいったいどのような書物なのか。それは『ロビンソン・クルーソー』だ、とルソーは言う。なぜなら「偏見にうちかち、事物のほんとうの関連にもとづいて判断を整理するもっとも確実な方法は、孤立した人間の地位に自分をおいて考えてみることで、そして、なにごとにおいても、そういう人間が自己の利害を考えて自分で判断をくだすように判断することだ」⁴³⁾とルソーは考えるからである。ルソーはまた「まず事物がそれ自体どういうものであるかを子どもに教えるがいい。それから、それがわたしたちの目にどう映るかを教えることだ。そうすれば子どもは意見を真実とくらべることができ、俗衆を超えたところに身をおくことができるだろう」⁴⁴⁾、とか「自分の利益、安全、維持、快適な生活、そういうものとははっきりした関連によってこそ、わたしの生徒は自然のあらゆる物体と人間のあらゆる労働を評価しなければならない。そこで、かれの目には鉄は金よりも、ガラスはダイヤモンドよりもはるかに高価なものに見えるなければならない」⁴⁵⁾などという言い方もしている。ところでこうしたルソーのことばの背景には処女論文『学問芸術論』以来の人間の文化にたいする根深い不信があることは否定できないが、ルソーはこれに関連してさらにつぎのような皮肉たっぷりな文章も書き残している。「さまざまな技術にはそれらの現実の有用性に逆比例して一般の評価があたえられている。この評価はほかならぬそれらの無用性に正比例してきめられるが、これは当然のことだ。もっとも有用な技術はもっとも儲けの少ないものだ。労働者の数は人間の必要に比例しているし、すべての人に必要な労働はかならず貧乏人が支払うことのできる価格しかもたないからだ。ところが、職人ではなく、芸術家と呼ばれ、有閑人や金持ちのためにだけ仕事をしているあの重要な人物たちは、かれらのつくりだすたわいのないものに勝手な価格をつけているし、

そういうくだらない作品の値うちは人々の意見のみによって決まるので、価格そのものがその値うちの一部をなすことになり、それが高価なものであればあるほど評価も高まることになる」⁴⁶⁾と。ルソーにとってはあくまでも「あらゆることにおいて、その効用がもっとも一般的でもっとも不可欠な技術こそ、……もっとも尊敬されてしかるべき」⁴⁷⁾ものなのだ。そしてそれこそルソーによればロビンソン・クルーソーの孤島での生活が教えてくれていることなのである。

ロビンソン・クルーソーをエミールにどのように読んでもらいたいかについてルソーはつぎのように述べている。「この物語りは、あらゆるがらくたをとりのけると、その島の近くでのロビンソンの遭難にはじまり、かれを島から救い出しにきた船の到着で終わっているが、これは、いま問題にしている時期のあいだ、いつもエミールを楽しませるとともに教えるものとなるだろう。かれはそれに夢中になって、たえずロビンソンの城や山羊や農場のことを考え、同じようなばあいに知っていなければならないあらゆることを、書物ではなく、事物に即してくわしく学び、自分がロビンソンになったつもりで、毛皮を身にまとい、大きな帽子をかぶり、大きな刀をもち、……挿絵に見るようなあらゆる奇妙なもちものをもった自分の姿を見る、といった調子であってほしい。あれこれのものがなくなったとき、どうしたらいいかと心配したり、主人公の行動を検討して、なにか忘れていないか、もっとうまくやることはできないものかしらべ、かれの過失に慎重な注意をほらい、それを教訓にして、同じようなばあいに自分はそういう過失をしないようにする、といったふうになってほしい」⁴⁸⁾と。城とはロビンソンが洞窟を利用して作った住まいのことであり、山羊とは森のなかで偶然見つかった野生の山羊のことであり、農場とは難破船からとりだしてきた布袋のなかにわずかに残っていた小麦と稲がたま

43) Ibid., p. 455

44) Ibid., p. 458

45) Ibid., pp. 458-459

46) Ibid., pp. 456-457

47) Ibid., pp. 459-460

48) Ibid., p. 455